DOJIN
R18
成人向け
大好きだった幼馴染は
魔物堕ちしてしまいました――。
鬼畜×純愛
堕落の花嫁
カンテラの喫茶店

「おはようユゥくん」
「あっ、おはようサラ」
彼女は幼馴染のサラ。
家が隣で、小さい頃からよく世話を焼いてくれる、年上の女の子だ。
「ふふふ、寝癖がついてるよ」
「え？　あっと……」
「直してあげる。後ろむいて？」
「あぁ、ありがとう」
サラの柔らかい手が俺の髪に触れる。

「……ごめん、ユウくんの背が高くて届かないや。ちょっとだけかがめる？」
「あぁごめん！　……これくらいで大丈夫？」
「うん大丈夫、ありがとっ」
そういえば、サラを上から見下ろせるようになったのは、いつからだろう。
昔は俺の方がずっと背丈が低かったが、いつの間にかサラが小さく見えるようになった。
「はい、直ったよ。これでもう仕事場のおじさんに笑われないね」
「それって昨日の……見てたの？」
「見てたよ」
寝癖なんてどうでもいいが、何だかものすごく恥ずかしい。

「……顔赤くなってる。恥ずかしいの？」
「そりゃあ恥ずかしいよ。何で？」
「だっていつも寝癖立ててるから、気にしてないのかと思ったんだもん」
「サラだから恥ずかしいんだよ」
「どういうこと？」
「あぁ、いや、何でも……」
「もったいぶってないで言ってよ～」
背中をポコポコと叩いておちょくってくる。
まったく、可愛い幼馴染だ。
俺にはどうも不釣合いな気がしてならない。

「どうしたの？　こんなところに呼び出して」
「いや、えーっと……」
「何か悩みごと？　私で良ければ相談にのるよ」
「えっとさ、驚かないで聞いて欲しいんだけど」
「俺と結婚してください！」

「……へ？」
「俺、小さい頃からサラの事好きだったから！
これからも一緒にいてほしい」
「わ、私なんかでいいの……？」

「嬉しい……！
私も小さい頃からユウくんが大好きだったから……」
「ほ、本当に言ってるの!?」
「うん♥
……それにユウくん、私がいないと心配だもの」
「は、ははっ……」

「本当、ユウくんからそんな事言ってくれるなんて……
これっぽっちも思ってなかったわ。これからはずっと一緒♥」
「お、俺だって断られると思ってたし……」
「ふふふっ、えらいえらい♥」

「そういえば、ママとパパがしばらく街に出ていて、家にいないの」
「えっと……それはつまり……？」
「……寄っていく？」
「うん……」
「ふふっ、顔が赤いわよ」
「だって……そういう事だろ？」
「……そういう事♥」

「サラの乳……前々から思ってたけどやっぱりデカいよな」
「は、恥ずかしい……」
「何で？　村で一番だって男たちには人気なのに」
「だって牛みたいだし……。というか何その話。そんな話してるの？」
「いや、まぁ……」
「私、ユウくんにだけ見られていたい……ユウくん以外にそういう目で見られるのは……」
（う、嬉しい……）

「触るよ？」
「うん…、あっ……」
「感じるの？」
「う、うん……はっ……んんっ♥」
むにっ
くいっ

「んっ……はっ……あっ……
ユウくんの手……気持ちいい……
頭がクラクラしてくる……」
はぁ
あっ
んっ

「んんんっ♥」
「うわっ!? 何か出たよ?」
「ごめんなさい……私、イクと母乳が出る体質みたいで……牛みたいで変だよね……」
「全然そんな事ないって! すっごいエロい!」
「ほんと……? ユウくんが喜んでくれるなら……♥」
んっ
ぴゅうっ

「んっ、じゃあ今度はユウくんが気持ちよくなる番ね……。
んっ、んっ、ユウくん……♥　ユウくんの……意外と大きくて……
口に入れるのが大変……んっ、んっ♥」
「んっ、んっ、ユウくんどう？　気持ちいい？」
「うん、すごく良いよサラ！」
「そう、よかった♥」

「あっ、イク……」
「んっ……んんッ！」
ビクビクビク
「すごい……ユウくんの濃いのすごくたくさん出てる……」
ビクビク

「ユウくん……来て……」
「怖くない？　大丈夫？」
「怖いけど……ユウくんだから大丈夫。早く一緒になりたい……♥」

「んっ……うっ……んんっ……」
「血出てる……サラ、処女だったの？」
「だって……ユウくんじゃないと……好きな人としかしたくないもの……」
「そんなに俺の事好きでいてくれたなんて……嬉しい。もう少し頑張って」

はぁっ
あっ
んっ
「んっ、あぁッ！　お腹の中に……ユウくんが……入ってる……。
痛いけど……幸せ……」

「はぁッ、んっ、あぁっ♥
ユウくん、ユウくんのっ、がっ、はぁッ……♥
入って……んんッ……♥
あっ、はっ♥」

「はっ、で、また……出るッ」
「いいよ……ナカに出して……♥
ユウくんのを私のナカに……」
ピクッ
ピクッ
めぁっ
「んッ！」
「はんんんッ♥
ユウくんのっ♥
ユウくんのがナカに……出て……んッ……！」

「んっ……気持ちよすぎて……体が動かない……♥
ずっとイキッぱなしで……頭がぼおっとする……♥」

「んっはぁっ、ユゥくん、ユゥくんのっ……んっ……♥」
「俺の……何？」
「いやっ、い、言わせるの……？」
「言ってくれたらすごく興奮するんだけどな」
「んんっ……ユゥくんの……お、おち○ぽ……
ユゥくんのおち○ぽ気持ちぃ……♥」

「んっ、ユウくん♥
ユウくんだいすきっ♥
はっ、んっ、んぐっ、んっ
ゆうくんっ♥
ユウくんの熱いの、
私のナカですごく
ビクビクしててっ♥
んっあぁぁっンッ♥
はっ、あぁッアッんっ♥」
ビックゥッ
ズッ
ズッ
ドクドクドク

「ふふふっ、見て、ユウくん♥
私のナカにユウくんのおち◎ぽ入ってるの♥
すごくえっちだよね♥
私のナカで何回もびくんびくんって
イッちゃってるのっ……
私もユウくんのおち◎ぽで
たくさんイッちゃった……♥
こんな私、はしたないね……
でもユウくんにだけだよ♥」

――数日後
「どうしたの、お休みの日にこんなところで……しかもこの格好……」
「サラに似合うと思って」
「もうっ……ユウくんはこういうのが好きなの？」
「だってすごく似合ってるし……すごくエッチだよ。……もしかして嫌だった？」
「嫌じゃ……ないけど……。ユウくん、こういう感じの服を着た女の人なら、誰でも良いのかなって……」

「そんなわけないだろ！」
「あっ、もうっ、こ、こんなところでっ！誰かに見られたら私……！」
「大丈夫、ここは人通りが少ないから」
「で、でもっ、んっんんッ♥」

「……なんかサラ、今日はやけに締まりがよくない？」
「そ、そう……？」
「いつもより感じてるみたいだし……もしかして野外が好き……とか？」
「そ、そんなこと……！」
「でも本当は、誰かに見られそうなのに興奮してるでしょ？」
「ち、違うよ……！」

「……冗談だよ」
「もう、ユウくんったら……そんな悪い子にはおしおきだよ」
「うわっ！」
「んっ……ユウくんのにおいがする……」
「んっ、ふっ、んっ……ユウくんユウくん♥
ユウくんだいすき♥
んっふぅんっ、んぐっ♥」

――数日後
突如現れた触手型モンスターによって村は壊滅。
「きゃぁッ！」
「く、苦しい……ッ！」
「サラ！」
「ユウくん！」
サラを助けようとするが成す術もなく、
モンスターに苦しめられている様子を
ただ見ていることしかできなかった。

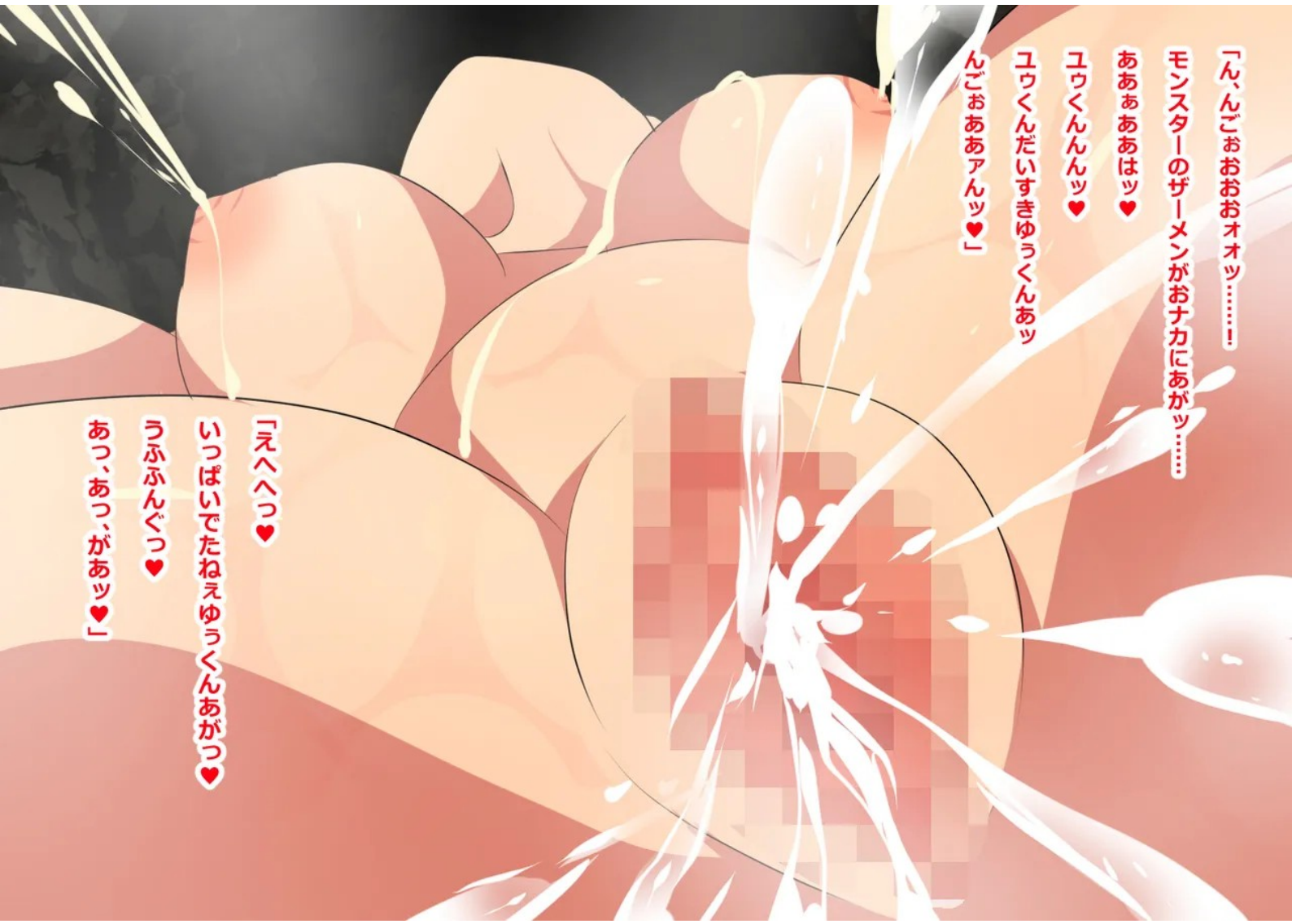
「……んっ……ここは……」
「きゃぁッ!?
な、なにこれ!?」
「み、みんな
モンスターの赤ちゃん
生まされてるの……?
いやっ……早く逃げなきゃ……!」

「や、やめて……！
そんな大きいの入らな……ぐぇッ！
あっ、いだい、いだっ……あぁッ……
やめでッ……抜いて……あぁッ……うっ……」

「あがっ……うぐごっ……
い、いだっ……あぁぁああッ！
し、しんじゃう……うっ……あぁッ……
おなかのナカぐちゃぐちゃにされて……うぐっ……
しんじゃう……」

「うごぅッ、こんなっ、こんなことされたら私……
ユウくんとの赤ちゃん産めなくなっちゃ……アッ……うぅ
うごッ……あっ……はッ……んあッ、おなか……いた……アッ……」

「うぐっ……ぐほぇッ……
ユウくんごめんなさいぃッ
わたし、ゆうくんのあかちゃんうめない
からだに……なッ……うごぅッ……
ちゃッった……あっ……
んッ……♥
んごっうううッ♥
もう……うぐっ
わたしのおま○こはモンスターせんよう
肉便器に……あっ……なっちゃった……♥」


「ん、んごぉおおおォオッ……！
モンスターのザーメンがおナカにあがッ……
あぁぁあはッ♥
ユウくんんんッ♥
ユウくんだいすきゆぅくんあッ
んごぉあぁァんッ♥」
「えへへっ♥
いっぱいでたねぇゆぅくんあがっ♥
うふふんぐっ♥
あっ、あっ、があッ♥」

「モンスター、モンスターだ！
村にモンスターが入ってきたぞ！」
「きゃぁあ！　逃げてっ！　早く殺して！」
「アッ……ウグッ……ングッ……」
「……おい、もしかしてお前……
サヤ……？」
「アガッ……ウグッ……
ユ……ユウグン……」
「おい……そんな……
嘘だろ……サヤ……
そんな体になって……サヤ……」
「ウグッ……ユウクン……
ユウクンダイスキ……ウフフフ♥」
fin